

終戦70年 体験を語る

終戦から70年。薄れつつある戦争の記憶の中から、貴重な証言を残そうと取材を重ねている。今回、戦争体験を寄せてくださったのは、日系人として米国で激動の時代を生きたメンバー（門信徒）など9人。空襲の下だけでなく、学校、学童動員の工場、疎開先も悲しい戦地だった。その苦悩を聞いた。

学童動員、空襲…戦争に染まった学生時代
隣の防空壕に逃げた同級生4人が亡くなった

東京都東小金井市 飼沼千枝子さん(89歳)



昭和19年12月3日、武蔵野高等女学校（宗門校、現・武蔵野女子学院高校）に爆弾が落ち

た。友人4人の逃げ込んだ壕を直撃し、みんな亡くなった。さっきまで一緒だったのに。私はたまたま隣の壕に逃げ込んだけれど、そうじゃなかったら…。結婚を控えていた子、黒縁メガネのおしゃれさん、足にゲートルを巻いていた男勝りの子。一瞬で人生が奪われた。彼女たちを思い出すと今でも言葉にならない。戦後、専門学校で学んだ3年間で生涯最高の時間だった。だって、学童動員も灯火管制もない、「自由」を初めて味わったから。自由を守り続けたい。犠牲になった友のために。

生まれ育ったハワイを襲った真珠湾攻撃
燃え沈んでいく米戦艦の姿に呆然

米国ワシントン州・タコマ仏教会メンバー 藤岡忠さん(90歳)



突然の爆音を聞いたのは、1941年12月7日朝。お寺の日曜礼拝に行く矢先だった。外へ

出ると、日の丸の戦闘機が連なり、低空飛行で数キロ先の真珠湾へ向かっていった。次々と米軍に襲いかかり、アメリカの戦艦は炎上、沈んでいった。こんな大國を攻撃するとは日本は何を考えているのか、と呆然としたのを覚えている。数日後、日本人の開教使は米本土に連れて行かれた。私たちは免れたが、本土では多くの日系人・日本人が収容所へ連行された。私は終戦直前に米軍に召集され、焼け野原の東京にも行った。戦争のことは子どもにも話してこなかった。もう二度と起こしてはならない。

学童疎開で大阪から滋賀へ
父のように支えてくれたお寺の住職

三重県津市 楯野正雄さん(81歳)



昭和19年8月から翌年10月までの長い疎開生活は寂しく、つらかったが、信光寺（滋賀県愛

荘町）での思い出は、つらい中にも温かさを感じた日々だった。いつも優しくかった木津龍尊住職（故人）。ラジオで大阪大空襲（20年3月）の被害を知り、泣き出す私たちを、住職は「心配するな」と励ましてずっとそばにいてくれた。父のような温かさが心強かった。戦後50年を機に信光寺で毎年、同窓会を開くようになった。あの時代をともに生きた仲間と分かち合う時間は、私にとって、もう一つの故郷へ里帰りするような感覚。疎開はつらい思い出だが、帰れる場所ができた。

疎開先の寺も一つの故郷に

和歌山大空襲で市内4割が焼失
お城の堀に飛び込み家族は助かったが…

和歌山市・妙慶寺門徒 庄禮恒子さん(84歳)



昭和20年7月9日深夜、防火用水で濡らした布団を頭から被り、焼夷弾が雨のように降る

下、火の海を逃げまどった。町の4割が焼ける中、家族で逃げ込んだのが和歌山城の堀。父のトッサの機転がなければ、防空壕で焼け死んでいた。その夜を境に行方がわからなくなった人も多い。隣家は若い家族で、徴兵された夫君からは出征時、「家族を頼みます」と言われていたが約束は果たせなかった。戦後、焼け野原の自宅跡で呆然と佇む夫君を見た。それ以来、会ったことはない。毎年7月9日、城の脇に建てられた戦没者の碑を訪ねる。引き裂かれた隣人のことが今も胸をよぎる。

疎開先の台湾で迎えた終戦
現地の雰囲気は一変、弟の遺骨を抱え帰国した

沖縄県石垣市・誓願寺門徒 田島信一さん(79歳)



八重山諸島からは台湾への疎開が多かった。私たちは父を石垣に残して家族5人で渡った。

飢えや病気で毎日のように人が死に、幼い弟も麻疹と栄養失調で亡くなった。痛いよ、痛いよ」と、か細く泣きながら息を引き取った弟の最期を、戦後父に話した。声を上げて泣く父を初めて見た。戦争が終結すると台湾の町は一変した。日本の支配から解放された喜びでお祭り騒ぎ。私は台湾の人が不気味に感じられ、仲が良かった人も遠ざけて歩いた。実際に石を投げつけられた人もいた。70年経たずとも、異国で死んだ弟と父の涙を思うとやりきれない悔しさが込み上げる。もう同じ道をたどってはいけない。

捕虜になるなら自決せよと迫った日本軍
被害は拡大し、弟・祖母とも生き別れた

沖縄県豊見城市 金城利一さん(81歳)



「捕虜になるくらいなら自決せよ」と日本兵に迫られ、家族4人で沖縄本島の南部へと逃げ

た。軍人は民間人になりすまそうと着物を身に付け、壕に入った。軍民の見分けがつかず、多くの犠牲者が出たが、私はそれでも「鬼畜米英」を信じて疑わなかった。弟や祖母とはぐれ、私と母は恥ずかしながら捕虜となった。日々、自分の命を守ることが精いっぱい、2人の行方を心配する感覚さえ失っていたのだろう。戦後、弟と祖母の死を知り、母と遺骨を探して歩いた。弟の小さな骨を見つけた時、母は胸に抱きしめて号泣した。人の心を取り戻した瞬間だった。あの姿は忘れられない。

わが子の遺骨に心取り戻した母

日系人収容所で過ごした戦中
アメリカに残るため受け入れるしかなかった

米国ワシントン州・タコマ仏教会メンバー 中川原豊子さん(93歳)



私たちは日系人は、アメリカ人からも日本人からも差別され、どちらが戦争に勝とうが、どうなるかわからない不安を抱えていた。

「アメリカに忠誠を誓うか」「米軍に志願し、国に奉仕する意思があるか」。キャンプに収容された日系人や日本人は、個別に面接を受け、この質問を突きつけられた。拒むと「NO、NO組」と呼ばれ、アメリカ各地の収容所から私たちがいたトゥーリーレイク収容所を集められた。日本人の誇りを失わず、日本へも帰らず、アメリカに残る覚悟を決めた私たち家族も、収容所生活を受け入れるしかなかった。戦争は皆が傷つけあい、誰も幸せにならない。やはり平和がいい。

広島原爆で累々と横たわる人々
弟とわかった唯一の手がかりはバックル

広島市東区・安楽寺前住職 登世岡浩治さん(85歳)



原爆が落ちた時は学童動員の工場にいた。自坊は爆心地から北へ2キロ。両親と姉は無事だったが、本堂は全壊していた。私は3歳下の弟を探しに爆心地方面へ。人々が累々と横たわる中を歩いた。ようやく会えた時、弟の顔は真っ黒で、唯一の手がかりはベルトのバックルだった。家に連れ帰り、4日目には家族でおつとめをした時、弟がかすかに「ありがとう」と言った。

亡くなったのはその2日後。弟は12歳、あれが最後の言葉だった。壊れた庫裏の天井板で棺を作り、火葬した。戦争で起こる悲しみを想像して、相手を感じる大切にしてほしい。今、地元の子どもたちにそう伝えている。

「ありがとう」が最後の言葉

不意に命奪われた姉の親友
「戦争は正しい」と信じ込み教えていた私

大阪市東住吉区・慈光寺門徒 龍野繁子さん(91歳)



原爆投下を前に米軍が訓練で落とした模擬原爆の事実を近年になって知った。犠牲者は全

国49カ所で約4000人。私が親しかった姉の親友もその一人。その朝、「いってらっしゃい」と見送ってくれた一言が彼女と交わした最後の言葉になった。不意に命を奪われたのだ。当時、国民学校の教員だった私は「この戦争は正しい」と妄信し、子どもたちに教えていた。自分の思想を持ち、語ることも許されなかった。でも考えを持たないのは恐ろしいこと。今の子どもたちには、自分でしっかりと考え、そして、思いやりの心を持って行動できる人であってほしいと伝えたい。

自分の考え持つことが大切

戦後味わった「自由」守りたい

引き裂かれた隣家の親子を想う

戦争は誰も幸せにならない